加藤一朗著

象形文字入門

中公新書

5

加藤一朗著

象形文字入門

中央公論社刊

加藤一朗（かとう・いちろう）

1921年（大正10年）に生まる．1944年，京都大学西洋史学科卒．現在，関西大学助教授．専攻，古代エジプト史．

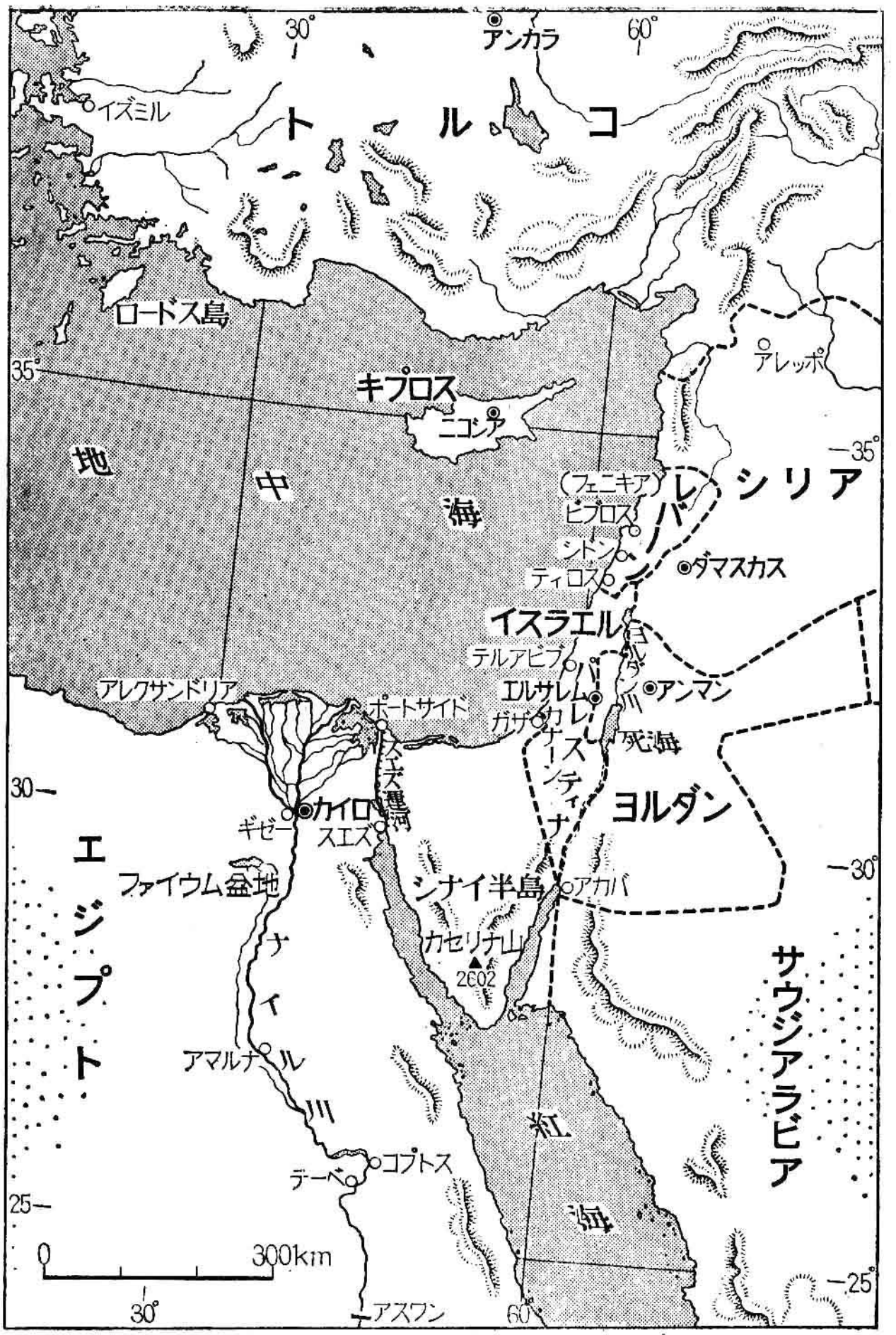
象形文字入門
中公新書 5
© 1962年
検印廃止
価200円

昭和37年11月15日 初版
昭和37年11月26日 再版

著　者　加藤一朗
発行者　宮本信太郎

本文印刷　三陽社
表紙印刷　東京プロセス
製　　本　小泉製本

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2—1
振替東京34　電話(561)5921代


30°
アンカラ
60°
イズミル
トルコ
ロードス島
35°
キプロス
ニコシア
アレッポ
地中海
レバノン
シリア
(フェニキア)
ビブロス
シドン
ティロス
ダマスカス
イスラエル
テルアビブ
エルサレム
ヨルダン川
アンマン
アレクサンドリア
ポートサイド
ガザ
カナーン
ティナ
死海
スエズ運河
ヨルダン
30
カイロ
ギゼー
スエズ
エジプト
ファイウム盆地
シナイ半島
アカバ
カセリナ山
2602
サウジアラビア
ナイル川
アマルナ
紅海
コプトス
デーベ
25
0
300km
30°
アスワン
60°

目次

インディアンの手紙　3
文字の発明／インディアンの手紙／絵と字／表意から表音へ／文明社会と絵文字／結縄／アズテックの「移民の記録」／怪奇なマヤの象形文字／文字を生むもの

ヒエログリフ　29
黒い船／ナルメル王のパレット／ヒエログリフ／横向きの顔／太陽の子／ヨコ書きとタテ書き／ホルスの目／暦／ヒエログリフのつづり方

パピルスのつたえる物語　61
パピルス／書記になれ／魂との対話／兄弟物語／ウェンアモンの航海／シヌヘの物語

永遠の生命　97
神々の書記、トト神／ピラミッド・テキスト／オシリスとラァ／死

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

者の書／カァ／アビドスの供養碑／護符／スカラベ／クフ王の母／生命のシンボル

ヒエログリフからアルファベットへ　133

シナイ山／牛の頭／海の商人、陸の商人／地中海のライバル／ギリシアの旅行家／デモティック／オシリスとキリスト／コプト文字とローマ字／ロゼッタ石

象形文字のいろいろ　171

楔形文字の誕生／ヒッタイトの象形文字／解読の待たれる象形文字（原エラム文字、クレタ文字、インダス文字）／甲骨文字

日本語の文字　187

付章　ヒエログリフの読み方　211

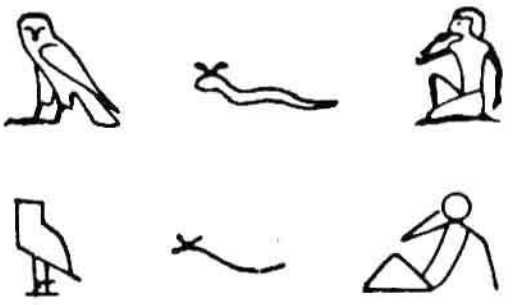
アルファベット／2音記号の例／決定詞の例／文章／単語集／練習問題／解答

年表　201

索引　214

象形文字入門

ナイル川上流にのこるコム・オンボ神殿遺跡の一部。ヒエログリフの美しい浮彫りである



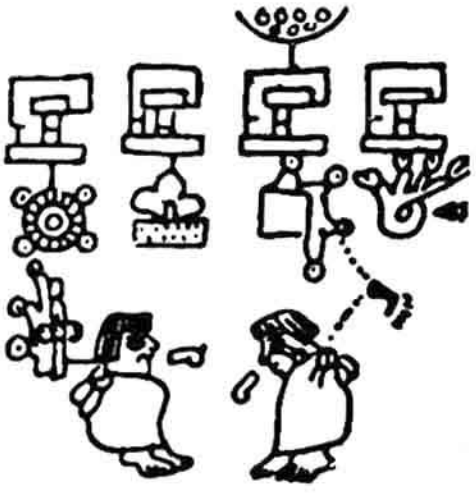
人　マムシ　フクロウ

●ヒエログリフの字体について

ヒエログリフの各文字の形はほぼ決まっているが、鳥なら鳥、人なら人の姿を、絵としてどの程度くわしく、または簡略に書くか、一定の標準というものはない。しかし、これでは研究上不便なので、現在では、欧米のエジプト学者によってヒエログリフの「活字体」ともいうべきものがつくられている。と同時に、研究者たちが筆記しやすいように、簡略な筆記体（古代のヒエラティックとは異なる）もできている。たとえば、目鼻をつけたフクロウや、体の厚みをえがいたマムシのヒエログリフは「活字体」で、反対に目鼻のないフクロウや、線状のマムシは筆記体である。

本書では、おもに「活字体」をもちいたが、「パピルスのつたえる物語」の章その他では筆記体を示してみた。

インディアンの手紙



泣いて別れを惜しむ酋長
（アズテックの絵文字）

文字の発明

人類が地上にあらわれてから三〇万年、あるいは五〇万年たったといわれている。この間に、いつどのようにして言葉がもちいられるようになったかは想像もつかないが、言葉の歴史は人類の歴史とほぼおなじくらい長いものであったと考えられている。

しかし、その言葉が文字に記されるようになってからどのくらいたったのであろうか。これは人類や言葉の歴史にくらべれば、ごく短く、約五〇〇〇年ほどのことである。

それでは、最初の文字は地球上のどこで書かれたか。現在われわれの知っているかぎりでは、メソポタミア地方（現在のイラク）の南部、ティグリス・ユーフラテス川の下流地方であったろうということになっている。

人類のもった最初の文字は、物の形をかたどってつくった象形文字であった。それゆえ、この象形文字がつくられる前に、文字の代用をしていたのは絵であったと考えられる。

今日ひろくつかわれている文字のなかで、絵の名残りの見わけられるのは漢字だけである。われわれはふつう、鳥、馬のような字が、もともと実際のトリ、ウマをモデルにしてつくられたということをほとんど忘れているけれども、そういわれれば、なるほどと思う。そしてこれらの漢字の祖先は現在、甲骨文字（図1）までさかのぼることができる。これを見れば、一見してその文

字が何をあらわしているか、はっきりわかるものが多い。

しかし、甲骨文字という名前が示しているように、これらの図形はもはや絵ではない。のちに述べるような、いろいろの文字としての機能を十分にそなえた、完全な文字である。そして、中国ではこの甲骨文字よりもっと古い形、もっと絵らしいものはまだ発見されていない。

図1　甲骨文字のいろいろ

このように、実際には絵から文字への発達の過程というものは、なかなかつかみにくい。しかし、象形文字の前段階に、文字の代りに絵がもちいられたということは疑いがない。この段階のものを絵文字とよんでいる。

絵文字と真の文字との境界は微妙なものである。また、象形文字の代表的なものと考えられ、これからくわしく述べようとしている古代エジプトのヒエログリフなどは、誰がみても一見絵であるので、ふつう絵文字とよばれている。しかし混乱をさけるために、この書物のなかでは一応、絵文字と象形文字という言葉を区別してもちいることにしたい。絵文字とは文字の代りにもちいられた絵、文字の前段階のものと解してほしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ひとたび文字が発明されると、人びとはこの新しい文明の利器の活用に熱中して、野蛮な時代の絵文字のことなどふりむきもしなくなる。それに「文字の発明」というものが、蒸気機関の発明とか電燈の発明などとはちがって、ながいあいだかかって「自然に生まれた」とでもいうほかないほど漠然としたものである。だから絵文字の性質について知るのには、ついに固有の文字をもたなかった人びとのあいだでもちいられたものの方が、かえって参考になる。

北アメリカのインディアンの社会がそのよい例である。

インディアンの手紙

西部劇によくあるシーン。ホロ馬車の列が荒野をゆく。すると、遠い丘の上に煙があがる。無気味な音楽。そしてインディアンの来襲。

「のろし」は実際インディアンのあいだでよくもちいられた通信の方法であった。

またかれらのあいだでは、各種のジェスチュアが伝達の方法につかわれた。これも映画で見る光景である。

ジェスチュアといっても、テレビで見るような、競技用の、その場その場で考案されるものではなく、もっと組織的なものであった。これには理由がある。かれらは言葉がたがいに通じない多くの部族に分かれていたので、異部族の間に意志の疏通をはかるために、各部族共通のジェス

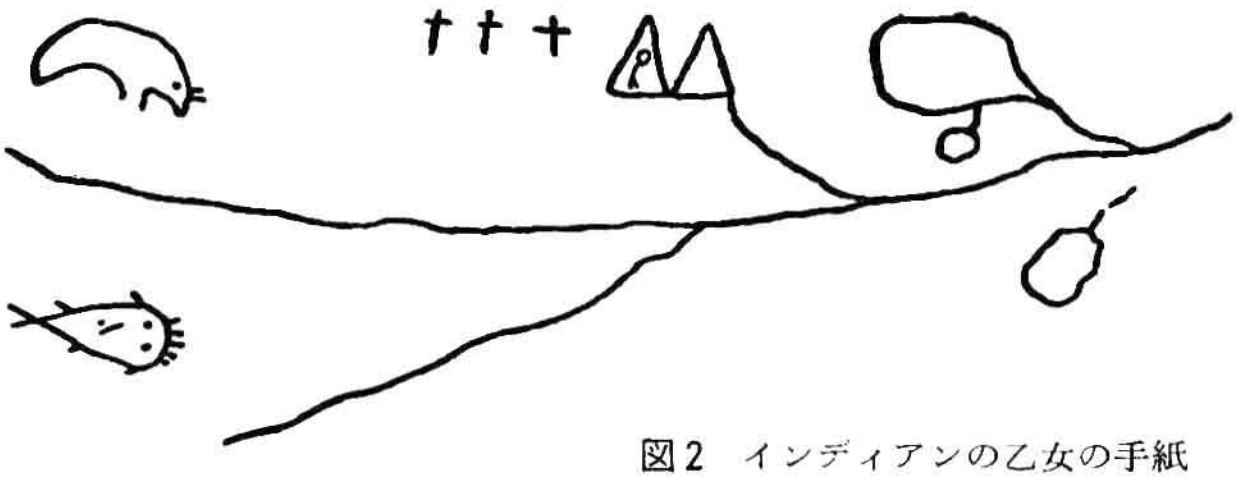


図2　インディアンの乙女の手紙

チュアが生まれたのである。

しかし、かれらのあいだに文字は生まれなかった。絵がその代用をしていたからである。

ここにインディアンの乙女から青年におくられた一枚の手紙がある（図2）。左に熊とサンショウウオの絵が見えるが、これは発信人・受信人の属する部族のトーテム（未開社会で部族がとくに神聖視する動植物・自然物）である。三つの十字と二つのテントとは「三人のクリスチャン乙女がキャンプをしている」という意味である。左側のテントから人の頭と片手がのぞいているのは「おいでをおまちします」という招待の意味。そして数本の道と右方の三個の湖とはキャンプにいたる道順を示している。

つぎの手紙はインディアンの父から息子におくられたものといわれる（図3）。年代ははっきりしないが、すくなくとも西部開拓時代以前のものではない。二人の男がむかいあって立っているが、左の方が父で、その名は頭上にならぶ大小一対の亀であらわされているように、「雌亀にしたがう雄亀」という意味のインディアン名である。名前と

本人の頭とが線でむすばれている。右の方が息子で、その名は「こびと」。父の口から言葉が線となって吐きだされ、その線が息子の方にのびていって鉤型となり、息子の変身である、右腕のところの小人物をたぐりよせようとしている。これが用件で「私のもとに帰りなさい」という意味。上方の五三個の小円は「帰省の費用として五三ドル送った」という意味であった。父と子がおなじ服装をしているのは、おなじ部族のものであることをあらわしている。この手紙は息子によって容易に理解されたという。

ここにあげた二つの手紙は一見したところ、疑いもなく絵である。われわれがふつう考えている文字とは縁がとおい。しかし、意味を考えながら見なおしてみると、いわゆる絵でもないことがわかる。つたない線であるが、その一本一本が何とかして「言葉」をつたえようと工夫されていることがわかる。むだな線はできるだけはぶいてあるし、背景のようなものもまったく省略してある。もし何か別の絵がつけ加えてあれば、受信人がそれに迷わされて、内容を誤解してしまうからである。

図3　インディアンの父の手紙

それならいわゆる絵とは何かということになるかもしれない。しかし一応、美術的な鑑賞を目的として描かれたものと規定しておいてよいであろう。もちろん例外はある。たとえばスペインのアルタミラやフランスのフォン・ド・ゴームにのこっている旧石器時代の洞窟画（図4）は、絵画の祖先であって、現代のわれわれの感覚からしても傑作であるが、おそらく描かれた目的は鑑賞のためではなく、呪術のためであった。

図4　アルタミラ洞窟の壁画（模写）。走る野牛

また逆に、文字が美術鑑賞を目的とする場合も多い。エジプトの象形文字の例、アラビア文字の装飾、中国・日本でさかんな書道などがこれにあたる。しかし、これはやはり、文字の本来の効用とはいえない。そこで一応、絵は美術鑑賞のためのもの、文字は言葉を記すためのものと区別してよいであろう。この意味で、絵文字はいわゆる絵ではないということになる。それなら、文字であるかどうか。この境界線もきわめて微妙なものである。それゆえ、その区別を理論的に規定してもあまり意味がないので、実際には両者がどうちがっているのか見てゆきたい。

図5　酋長の戦勝の記録

絵と字

もう少し例をあげてみよう。インディアンは手紙以外の記録にも、さかんに絵文字をもちいた。

「走るカモシカ」という名の酋長は、上のような戦勝の記録を描かせた（図5）。馬上の戦士が本人で、その名「走るカモシカ」は下方に記されている。楯のタカの絵はかれの家の紋どころ。点線はかれのたどったコース。左下のかこいはくさむらを示している。くさむらのなかの人物と五丁の銃は五人の戦士で、かれがこの戦闘でたおした敵をあらわしている。人物の服装はそれぞれの部族をあらわしている。

またある老齢の酋長は、ものごころついて以来毎年の最大事件を水牛皮の服に記して誇りとしていた。たとえば図6のaは百日咳大流行の年であった。bは大流星のおちた年であった。またcは異なった部族間に和平の成立した年であった。ちょうどわれわれが「震災の年」「終戦の年」「伊勢湾台風の年」などとよぶのに似ている。

「父の手紙」（図3）と「戦勝の記録」（図5）とを見くらべてみると、言葉をあらわすためにいろいろ工夫がこらされており、五三ドルを五三の円であらわすとか、五人の人物を五丁の銃であらわすとか、絵を組み合わせて人名をあらわしている点などは、象形文字の初期の表記法と似ている。

しかし、部分的な表記法が象形文字に似ているというだけで、全体が文字からなる一つの文章であるとはとてもいえない。ただ、インディアンの間では、ジェスチュアの場合と同様このような絵も、個人のその場その場の思いつきで描かれたものではないようである。すくなくともおなじ部族に属するインディアンは、人なら人、馬なら馬を、まったくおなじような形に描くことができ、おなじ部族のなかでは、一人のインディアンの書いた手紙を他のインディアンが容易に理解することができたという。

この点インディアンの絵文字は、絵文字としては発達したものであった。たとえば、アフリカの未開民族の間でも、さかんに絵文字がもちいられるが、これを理解することができるのは、描いた本人と、その意味を知らされたごく親近のものにかぎられている。

人なら人、馬なら馬をあらわす形がきまるということは、絵から文字への発達の上に重要なことである。これを文字の定型化というが、これとな

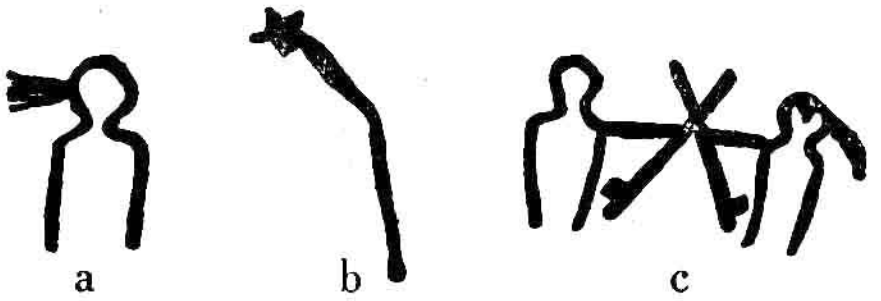


図6　インディアンの年代記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com